

コロナ禍の中の“適疎な観光”

近年の観光用語に「サステナブル・ツーリズム（持続可能な観光）」という言葉があります。現在だけではなく未来も含めた地域経済、社会、環境への影響を十分に考慮し、地域の資源である「自然」や「文化」「歴史」、「そこで暮らす人々」、また東川町においては「写真の町」を基盤に取り組んでいるさまざまな町独自の文化を活用して、町外からの旅行者などを受け入れて地域経済を発展し、町民の誇りや今後も住み続けられる町づくりができないか、という考え方です。

コロナ禍でいろいろな行事等も中止となり、こと観光においても厳しい状況が続いています。現在、観光のニューノーマルは「安心・安全」が基本となりますが、町外からの観光客の受け入れはこれまでのような大人数や団体などではなく、旅行や観光ニーズも多様化してきています。「個」の旅行が増え、さらにソーシャルディスタンスを保った「密ではなく疎の観光」となってきています。つまり、いま東川町をはじめ農山漁村地域の持つポテンシャルに可能性が広がってきており、「疎地域への観光」が注目されています。「オーバーツーリズム（過剰な観光客の受け入れ）」ではなく、「疎の観光」を継続的に受け入れることで「持続可能」な観光やまちづくりにつなげていけるのではないかと考えます。



大雪山の麓〜ひがしかわ的観光イズム

さて、そんな中、7月に事務所を進化台から西町2丁目に移転しました。移転に合わせ新たに観光アクティビティの情報発信型



リアル店舗「Higashikawa Activity Center（通称：HAC）」を構えました。観光案内のほか体験プログラムの提供、ツアーの受付やアウトドア用品の販売やレンタルをおこなっています。町内で体験観光の企画会社として18年積み重ねてきたノウハウを、観光アクティビティに特化した対面型の「リアル店舗」を構えることで、コロナ禍の中、地域密着型で東川に訪れる観光客の新たなニーズに対応しながら、観光ツアー造成や案内、来訪者と町民のみならずとの交流の場としての「適疎な町」での「適疎な観光」専門店を目指していきます。観光は観光客を迎え入れるだけではなく、地域住民との交流を通して東川町の良さや魅力の発信につながり、一方で来訪者から得られる気付きや課題などを学ぶこともできます。本号より東川での観光を通じて感じたことなどをつづいていければと思います。（つづく）

アクティビティ提供専門ショップ「HAC」
（有）アグリテック代表 中田 浩康



（写真：https://vokkr.ru/）

日本では9月1日と言えば「防災の日」ですが、ロシアでは「知識の日」です。学校の新学期の始まりが9月1日であることから、1935年に制定されました。ロシアでは基本的に小学生から高校生までが同じ学校に通っており（※1）、9月1日には全国の学校でセレモニーが行われます。初めて出席する1年生と、一つの節目を迎える5年生の親が参列することも多いです。生徒は制服を着て、花束をもって登校します。制服は学校によって違いがありますが、制がない学校ではドレスコードがあり、上が白で下が黒となっています。セレモニーの最後には優秀な11年生の男の子が1年生の女の子を肩に抱

知識の日



東川町国際交流員（CIR）キロウア・アイタリー

っこして、その女の子が初ベル（※2）を鳴らします。1年生の選び方は大体リスト表一番目に名前が載っている子か、一番軽い子か、高校生の妹だったり、先生の娘だったりします。選ばれた1年生と11年生の二人は誇らしい気持ちで初ベルを鳴らしながら、学校の前を歩きます。セレモニーが終わったら、1年生は挨拶の仕方や、学校のルールなどについての初授業を受けます。最後に、生徒は持ってきた花束を担任の先生にあげ、先生方はたくさんの方を祝福して花束を持って帰路につきます。このように、ロシアの学校では9月1日の「知識の日」に新学期を祝う盛大なセレモニーが開催されるのです。

（※1）ロシアの義務教育は初等4年・中等5年・高等2年の11年間
（※2）初ベルは人生の最初のレッスンが始まることを子どもたちに知らせる合図とされています。

